

ハンターkorori、『海賊王の秘宝』を巡る冒険の記憶をここに記す。

12月4日、未明より宝島への旅へ出発する。

今回この冒険に共に挑むのはJランクハンターの「ヤマパン」と「ダイゴロー」。2人とも登録したばかりの新米ハンターだが、そのみなぎる気合いには期待せずにはいられない。東京で合流したダイゴローは前日全然眠れなかったとのこと。片やせっかくだからと前日から一人松山観光を満喫していた余裕のヤマパン。それぞれ違ってそれぞれ良いのが「チームSSSG」。三津浜港でメンバーが揃い、改めて『海賊王の秘宝』入手を誓い合った。

一路、船に揺られて宝島へ。波に揺られる船に平衡感覚が刺激され、唸るエンジン音に会話の声はかき消され思いのほか静かな船旅となった。チームの仲間は、そして他のハンター達はこの時間宝に思いを馳せていたのか。それとも船の揺れに静かに耐えていたのだろうか。ちなみに自分は8割がた後者だった。

宝島への上陸は予想外のジャンプアクション。華麗に決めるチームSSSGの三人。ここで靴下を濡らしたらテンションが急降下するだろうとの心配は杞憂に終わった。さすがだ。

さて、島での滞在準備を整え、いよいよ協会から手掛かりを受け取る。アベルの地図とロック海賊団鉄の掟。

なるほど、現時点では正直よくわからないが、まずは食料を確保しなければ海賊王の宝どころではないだろう。今日の目標はまずは最低限の食料を確保すること。そして、できるだけ海賊王の宝への歩みを進めることだ。このバランスは状況に応じて臨機応変に調整していこう。

当初の作戦としては、体力に自信があるヤマパンにダイゴローと組んでもらい搜索範囲が広そうな秘密の頂き方面の食料を回収。自分は鉄の掟の暗号らしきものを読み解きつつ、迷いの森方面の食料回収と分担を行う。適宜連絡を取りながら。

円陣を組み、気合いを鼓舞し、秘宝への情熱を再確認。いざ探索へ出発だ。

で、だ。海賊のアジトの裏手の斜面を上り始めすぐに実感した。何この斜面、キツくない…？これ、まだまだ序の口でしょ？いやぁ、この先の過酷さをいきなり突きつけられたようだ。早々にひなどりの巣から手に入れた宝玉を託され、いよいよそれぞれの道へ。

記録として重要なのはここからなのだと思う。が、想定以上の過酷な探索によりもうそれどころではない、というのが正直なところだ。

一歩踏み間違えれば崖下に真っ逆さまになりそうな道、どこに足を置いたらいいのかわか

らず上にも下にも動けなくなる崖面の移動、一步踏み出せば三步分後ろにずり落ちる急な登り斜面。果たして楽に歩ける道などあるのか。足に、腕に、そして精神に疲労がどんどん蓄積されていく。そして追い打ちをかけるように、探している食料がなかなか見つからない。泣きそう。

そんなとき、ふと目を落とした鉄の掟。これは…！近くにいた自分が暗証番号を入手。秘密の頂に近づいていた仲間に託す。そして海賊王の地図をゲット！偶然ながら見事な連携！

さて、次なる悩みは自分の手元にある鳥の羽とアベルの末裔の近くにいる仲間。いやあ、どうする？届けに行くのが効率はいいのかな？尾根から眺める山頂の高さに軽く絶望を覚えるも、意を決して歩みを進める。が、力尽きる。そこに颯爽と降りてきて、羽を受け取り山頂へと踵を返すヤマパン。いや、カッコイイだろ。やがて戻ってきたヤマパンから手掛かりを受け取り、ダイゴローとともに拠点に向かってもらう。

この判断が今日の最後にあんな冒険をもたらすことになるとは、このときは想定していなかった。

二人を見送り斜面で休憩しながらここまで入手した手掛かりを眺めていたら、山頂に行きたくなってしまったのだ。時間はある。体力はキツイ。どうする？…行きたい！これがハンターの性なのか。さすがに体力担当のヤマパンとはいえ、ここからまた登って来いとは言えない。…行こう。

半泣きになりながらたどり着いた山頂。アベルの末裔に会えたことにこんなに喜びを感じるとは。

頑張った甲斐あっていくつか搜索も進み、まだ奥へ行きたかったがそろそろ戻らないと集合に遅れてしまう。あの急斜面、歩いて降りるのは最初からあきらめて尻で滑って降りる。これも充分怖い。勢い余って木に激突したりしないように気をつけねば。

道中偶然一緒になった他チームのハンターと「無事に拠点まで下山する同盟」(勝手に命名)を組み、互いの安全確保と心の激励をしつつ帰路を行く。すごく励みになって楽しい道中を過ごせた。ありがたい。

近づいてきた拠点で大きく手を振り迎えてくれるヤマパンとダイゴローが目に入ったときは、心の疲れが吹っ飛んだ気がした。身体の疲れは逆にどっと出てきた感覚だったが。

思いのほか大量に手に入った食材。自分を労わって率先して食材整理と調理を担当してくれた仲間たちに感謝しながら、三人でレモンサワーのプルタブを開けた。